新古今和歌集

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「新古今和歌集」（峯村文人校注、平成七〔一九九五〕年、小学館刊）によった。

▼成立

二十巻、約千九百八十首からなる、第八番目の勅撰和歌集（八代集の最後）。後鳥羽院の下命を受けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経が撰進した。寂蓮も下命されたが、編集途上の建仁二（一二〇二）年に没したので撰者には含めない。成立過程は四期に分けられる。第一期は建仁元年十一月の下命から、同三年四月までで、撰者たちが候補作を提出した時期。第二期は元久元（一二〇四）年六月までで、その候補作を後鳥羽院自らが手を下して精選した時期。第三期は元久二年三月二十六日までで、院の精選した和歌を、撰者たちが部類し完成させた時期。第四期は建保四（一二一六）年十二月頃までで、いったんは完成したはずの集に対し、改訂作業が続けられた時期である。かつてない勅撰和歌集を作り上げようとする、後鳥羽院の執念と行動力が如実にうかがわれる。それは、古代の理想社会を今に再生しようとする情熱である。古歌や物語を踏まえる本歌取りの技法は、表現におけるその端的な表れといえよう。

参考文献

❇教師用

▽注釈書

新日本古典文学大系「新古今和歌集」　田中裕他　岩波書店　平四

新編日本古典文学全集「新古今和歌集」　峯村文人　小学館　平七

新潮日本古典集成「新古今和歌集」　久保田淳　新潮社　昭五十四

「完本新古今和歌集評釈」　窪田空穂　東京堂　昭三十九〜四十

「新古今和歌集全注釈」　久保田淳　角川学芸出版　平成二十三〜二十四

▽入門書・研究案内・辞典

鑑賞日本古典文学「新古今和歌集　山家集　金槐和歌集」　有吉保他　角川書店　昭五十二

鑑賞日本の古典「新古今和歌集　山家集　金槐和歌集」　有吉保他　尚学図書　昭五十五

研究資料日本古典文学「和歌」　大曾根章介他編　明治書院　昭五十八

「【うた】をよむ一三十一字の詩学」　小林幸夫他　三省堂　平九

「和歌大辞典」　犬養廉他編　明治書院　昭六十一

「歌ことば歌枕大辞典」　久保田淳他編　角川書店　平十一
「歌枕歌ことば辞典　増訂版」　片桐洋一　笠間書院　平十一
「新古今和歌集入門」（有斐閣新書）上條彰次他　有斐閣　昭五十三
「西行山家集入門」（有斐閣新書）久保田淳　有斐閣　昭五十三
「名歌名句大事典」　久保田淳・長島弘明編　明治書院　平二十四
「和歌文学大辞典」　古典ライブラリー　平二十六

※ **生徒用**

新潮古典文学アルバム「新古今和歌集・山家集・金槐和歌集」　佐藤恒雄他　新潮社　平二
「和歌文学の基礎知識」（角川選書）谷知子　角川学芸出版　平十八
「新古今和歌集」（角川ソフィア文庫）久保田淳　角川学芸出版　平十九
「新古今和歌集」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）小林大輔　角川学芸出版　平十九
「和歌とは何か」（岩波新書）渡部泰明　岩波書店　平二十一
「古典和歌入門」（岩波ジュニア新書）渡部泰明　岩波書店　平二十六
「和歌のルール」　渡部泰明編　笠間書院　平二十六

図版解説　〈新三十六歌仙画帖〉

フェリス女学院大学付属図書館蔵。江戸時代前期（一七世紀）。絹本金銀泥彩色画。狩野洞雲（益信　一六三五―一六九四）画。「新三十六歌仙画帖」は後鳥羽院が撰んだと言われる歌仙を描き、表に絵色紙、裏に詞色紙を貼付している。裏の詞色紙の和歌は「左　前中納言定家／しら玉のをだえのはしの名もつらしみだれてをつる袖のなみだに」。⇩ P 263

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

男ども　詩を　作りて　歌に　合はせ　侍り　しに、　水郷の　春望
格助・対象　ラ四・用　接助・単接　格助・対象　サ下二・用　補動・ラ変・用（丁）撰者→読者　過・体　格助・時間　格助・体修

と　いふ　こと　を
格助・引用　八四・体　格助・対象

見渡せ　ば　山もと　霞む　水無瀬川　夕べ　は　秋と　なに　思ひ　けむ　（巻一・春上・三六）
サ四・已　接助・順偶　マ四・体　係助・区別　格助・引用　副　八四・用　過原推・体

近臣たちが漢詩を作って和歌に合わせましたときに、「水郷春望」という題を（詠んだ歌）
はるかに見渡すと、山の麓に霞がかかって、（そこに）水無瀬川が流れている。夕暮れ（のすばらしい季節）は秋だと、どうして思い込んでいたのだろう（この春の夕暮れも、すばらしいではないか）。

《主題》
水無瀬の春の夕暮れに、新たな美を発見した喜びを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六二ページ

問「**夕べ**」とは、**具体的に何を意味しているか。**

答 夕暮れの景色の趣

問「**夕べは秋となに思ひけむ**」（**12行目**）とは、**どのような気持ちか。**

答 春の夕暮れもすばらしいではないかという気持ち。

語句の研究

●二六二ページ

11男ども　「をのこ」は殿上人もしくは蔵人をいい、ここでは後鳥羽上皇に仕える臣下たちを指す。

11詩を作りて…侍りしに　元久二（一二〇五）年六月の後鳥羽上皇主催の「元久詩歌合」での作。「詩歌合」とは、漢詩と和歌を番わせるかたちで享受するもので、その形式は藤原良経によって確立されたとされている。このときも、そもそもの企画者は良経であり、後になって後鳥羽上皇の主催となったことで大規模なものとなり、結果として以後の歌壇に規範として踏襲されていった。なお、詩歌合では、後鳥羽上皇の帝時代に侍読（学問の教授）であった藤原親経の「湖南湖北山千里。潮去潮来浪幾重」と合わされた。

11水郷の春望　「水郷春望」とは「水辺の里の春の眺望」という意味の題。ちなみに「元久詩歌合」は「山路秋行」との二題で催されている。

12見渡せば　「はるかに見渡すと」「遠く広く

補 夕暮れの情趣は秋がすばらしい、と思い込んでいた今までの自分の価値観をいぶかしみ、既成の王朝的美意識に異を唱えると同時に、水無瀬の夕景に新たな美（春の夕暮れのすばらしさ）を発見した喜びである。この歌の前提にある「夕べは秋」という認識を「枕草子」の「春はあけぼの」などで確認したい。後鳥羽上皇は同様に「枕草子」を念頭に置いた歌、「曙をなにあはれとも思ひけむ春暮るる日の西の山かげ」（正治二年「院初度百首」）などをすでに詠んでおり、歌壇の中心者として、新しい美を発見していこうという意欲が感じられる。

問 **作者は、どのような情景に感動してこの歌を詠んでいるのか。**

答 遠くの山の麓のあたりがかすみ、近くには水無瀬川が流れている情景。

問 **この歌の新鮮味はどのような点にあるか。**

答 古来、秋こそが夕暮れの趣深い季節とされてきたのに対して、春の夕景色の趣を発見し、賞賛している点。

見やると」。水無瀬離宮（「水無瀬川」の項目参照）からの遠望か。「渡す」は「広く…する」の意を添える補助動詞。

12 山もと霞む　山の麓に霞がかかって。「山もと」は山の麓。山の位置は水無瀬川左岸、淀川左岸、淀川対岸など諸説ある。

12 水無瀬川　「水無瀬川」は現在の大阪府三島郡島本町を流れ、淀川に注ぐ川で、摂津の国の歌枕。川の南に後鳥羽上皇が愛した水無瀬離宮があり、歌合や歌会などが催された。なお「万葉集」の「水無瀬川」は、本来「水の無い（見えない）川」の意の普通名詞。

12 夕べは秋　夕暮れの情趣は秋がすばらしい、という価値観は「枕草子」の「秋は夕暮れ」に代表される美意識だった。

12 なに思ひけむ　「どうして思っていたのだろう」。「なに」は疑問の副詞で、「けむ」は過去の原因推量。副詞「なに」と呼応して連体形（係助詞以外でも、文中に疑問や反語の意を持つ語があるときは、連体形で結ぶ）。夕暮れの情趣は秋に極まると思っていた今までの価値観（既成の王朝的美意識）をいぶかしむことで、春の水無瀬の夕景を前に、春の夕暮れもすばらしいではないか、と新たな美を発見した喜びの表現。

作者

後鳥羽上皇

治承四（一一八〇）年～延応元（一二三九）年。第八十二代天皇。高倉天皇四宮。母は修理大夫藤原信隆の娘殖子（七条院）。寿永二（一一八三）年七月の平家都落ちの際、平家と同行した安徳天皇に代わり、神器がないまま践祚した。建久九（一一九八）年、十九歳にして土御門に譲位して院政を開始、同時に和歌に熱意を示し始める。院を中心とした歌壇は盛況を極め、多くの和歌行事の開催や和歌所の開設といった業績を残し、その成果は「新古今和歌集」に結実した。承久三（一二二一）年、承久の乱を起こすもすぐに敗退、北条氏によって隠岐に流されて同地で没した。「新古今和歌集」の代表歌人であるとともに、歴代の皇室歌人の中でも傑出した存在である。家集に「後鳥羽院御集」、歌論に「後鳥羽院御口伝」。「新古今和歌集」には「太上天皇」として三四首入集。

鑑賞

「枕草子」などに見られる「秋は夕べ」という通念が前提となった歌である。上の句の叙景、下の句の抒情という歌の構成や発想は、古注以来、藤原清輔の「薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕べとたれかいひけむ」（「新古今和歌集」秋上）と比較されてきた。清輔の歌も、眼前の光景から、今までの美意識を疑うという実感を詠んだ歌であるが、「たれかいひけむ」という結句は後鳥羽上皇の歌に比べるとやや客観的と言えよう。「水無瀬」という地名や、「なに思ひけむ」という内省の中に、こよなく愛した水無瀬への思いや、新たな美を発見していこうという気概が感じられる。

〈参考〉「枕草子」

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の、寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

宮内卿

千五百番歌合　に、　春歌
　　格助・時間

薄く　濃き　野辺　の　緑　の　若草　に　跡　まで　見ゆる　雪　の　むら消え
形ク・用　形ク・体　　格助・体修　格助・体修　格助・理由　副助・限度　ヤ下二・体　格助・体修

（巻一・春上・七六）

千五百番歌合のときに（詠んだ）、春の歌

薄いのも濃いのもある野辺の緑の若草によって、その跡までもが分かることだ。雪が（あるいは早く、あるいは遅く）解け消えていった、一様ではなかったその様子が。

《主題》

春の若草の緑の濃淡から雪解けの遅速を見てとった機知に富んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問 **作者の宮内卿とは、どのような人物か。**

後鳥羽上皇の女房として出仕していた歌人。

問 答 **この歌は、「古今和歌集」の「緑なるひとつ草とぞ（　①　）は見し（　②　）はいろいろの花にぞありける」を下敷きにしているとされるが、（　　）に入る季節をそれぞれ答えよ。**

語句の研究

●二六三ページ

1千五百番歌合　建仁二（一二〇二）年～三年に行われた、後鳥羽上皇主催の史上最大の歌合。当時の代表的歌人三十名が百首ずつ歌を提出して成った。ただし歌合は実際に行われたのではなく、歌が机上で合わされたもの。判（判定）には判詞を詩句や和歌で記した判詩や判歌などユニークな形式が見られる。「新古今和歌集」撰進へ向けて動いている後鳥羽上皇歌壇の記念碑的行事で、「新古今和歌集」にはここから九十一首が入集している。この歌はそのうち百二十番左で勝ちを得ている。

2薄く濃き　「薄いのも濃いのも」。直接的には「緑」に掛かり、生え揃っているか否かなどで、見た目に映る若草の緑が同じ一つの色ではないことをいう。この歌は「緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」（「古今和歌集」巻四・よみ人知らず）が下敷きになっていると考えられており（これを「本歌」とする説もある）、春の緑もまた一色ではないと見ると

答　①春　②秋

問 ◉**「跡まで見ゆる」（2行目）とあるが、何の跡が、何によって分かるのか。**

答　雪が早く解けたか遅く解けたか（を示す形跡）が、若草の緑の濃さや薄さによって分かる。

補　跡とあるが、作中の主体の、もしくは作品の世界を享受する我々の眼前にあるのは、野辺に生え初めた若草の緑色が一様でなく、ところどころ薄かったり濃かったりしていることのみであることに注意したい。そこに形あるものとしてはまるで見えていない季節の推移が、ささやかな事実に着目した瞬間に、リアルな景としてありありと立ち上がってくる、その不思議さにこそ、この歌の獲得し得た表現の妙があることを理解させたい。

問 **「まで」を文法的に説明せよ。**

答　限度を表す副助詞

問 **「むら消え」とは本来どのような状態を言う語か説明せよ。**

答　まだらに消えるという意味であり、逆に言えばまだらに残っているということでもある。

ころに新しさがある。先に見た後鳥羽上皇の歌のように、古典的な通念や把握を乗りこえた新たな美の発見を企図したものと考えることもできる。

2若草　芽を出して間もない早春の草。残雪との対比などによって、みずみずしい緑を詠むものが多い。一方で、「春日野はけふはな焼きそわか草のつまもこもれり我もこもれり」（「古今和歌集」春・よみ人知らず）のように、「若草の」という形で「つま」や「にひ」などに掛かる枕詞としての用法もあるように、若い女性のイメージとも重ねられる景物である。夭折した宮内卿は、永遠に「若草の宮内卿」のままである。

2跡まで見ゆる　「跡が見て取れる」。「見ゆる」は語源的にはマ行上一段活用動詞の「見る」に、上代の自発・可能・受身の助動詞「ゆ」が付いたものとも言われているが、ヤ行下二段活用「見ゆ」の連体形と把握する。

上代（奈良時代）の助動詞「ゆ」の活用

四段・ナ変・ラ変の未然形に付く。

未然	連用	終止	連体	已然	命令
え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	○

ここは「自発」で、「目に映る」「見える」の意であるが、「可能」の要素が強い。春が訪れ、雪の痕跡はもう何処にも残ってはいないのであるが、若草の緑の濃淡によって、緑の濃い部分は雪が早く解け、緑の薄い部分は比較的遅くまで雪が残っていたのだろうと推量し、その跡をはっきりと見て取れると詠んでみせるのである。

2むら消え　斑に消えることであるが、それはすなわち斑に残ることでもあって、普通は消え残っているもののほうに重点を置いて使う語。雪である場合が圧倒的に多く、ほかに霧や霞などの例がある（「歌ことば歌枕大辞典」）。ただし、この歌においては雪が一部に残っているような景を想起しては興醒めなのかもしれない。ここでの雪は、若草の緑の僅かな違いに改めて注視することによって初めて視線の先に〈幻視〉されるもののはずである。

作者

宮内卿

生没年未詳。文治元（一一八五）年頃生まれ、元久元（一二〇四）年もしくは同二（一二〇五）年頃、二十歳くらいで没したか。鎌倉初期の女流歌人。父は源師光で、兄、具親とともに歌人。後鳥羽院の女房で、若くしてその歌才を見出され活躍したが、「新古今和歌集」の完成を待たずに世を去ったと思われる。「無名抄」は作歌に熱中したあまり病を得たと伝える。「薄く濃き」（六一・5）の歌で若草の宮内卿と呼ばれた。

鑑賞

作者に天才少女「若草の宮内卿」の名声を与えた一首である。出典である『千五百番歌合』について語る『増鏡』第一「おどろのした」も、多くの名歌のなかから特別に当該歌を引いて「去年の古雪の遅く早く消えける程を推し量りたる心ばへ」であるとの解説まで加えて彼女の早世を惜しんでいる。

久保田淳『新古今和歌集全注釈』なども指摘するように、正治三（一二〇一）年正月の『影供歌合』での藤原有家の作、

山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞ来にける雪のむら消え

（新古今和歌集・雑歌上・一四三七）

から着想を得ていて、必ずしも彼女の独創によるとは言い難い作であるのかも知れないし、窪田空穂らが「理知的に過ぎる」と評しているのも故無しとは言えない。ただ、眼前にない雪の消えていく様子までも幻視させる一首としての達成は紛れもなく新古今的であり、広く人口に膾炙して彼女の代名詞となった作である。後世の指摘や批判はこ歌の価値を少しも貶めるものではない。

品詞分解と現代語訳

題知ら　ず
打・終

誰か　また　花橘に　思ひ出で　む　我も　昔の　人と　なり　な　ば
係助・疑問（係）　副　格助・理由　ダ下二・未　推・体（結）　係助・同類　格助・体修　格助・変化　ラ四・用　完・未　接助　順仮

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

藤原俊成

（巻三・夏・二三八）

作歌事情は不明

誰がまた花橘の香りから（今の私がしているのと同じように、私のことを）思い出すだろうか。私も世を去って昔の人となってしまったならば。

《主題》

人は花橘につけて懐旧し、故人を偲んで歌にも詠むが、自分もそうして偲ばれることがあるだろうかと想像した歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問「**思ひ出でむ**」（**4行目**）**とあるが、誰が何を思い出すのか。**

補 **答**（私の死後に）誰かが私のことを。

「昔の人」が故人を指すとなれば、「私」が「昔の人」になるのはもちろん「私」が死んでからのことになる。さっきまで故人とともに歌を詠んでいた人が、自分が死んでからのことを思い出すだろうかと想像しているのである。

語句の研究

●二六三ページ

4 誰かまた…思ひ出でむ　二六一ページ「古今和歌集」「五月待つ」の歌の本歌取り。（今の私がしているのと同じように、私のことを）「誰がまた…思い出すだろうか」。「か」は疑問の係助詞、「む」はそれを受けて推量の助動詞の連体形であり、ここで三句切れになる。反語と解する説もあり、その場合は作中の主体に「思い出されることはない」という確信が必要になるはずであるが決め手を欠いており、ここでは疑問と解しておく。「五月待つ」の歌のように、橘の花の香りによって、親しく交際していた人、この場合は作者自身を想起することをいう。

4 花橘　先に見た「古今和歌集」の「五月待つ」（二六一・2〜3）の歌は、人口に膾炙するのみならず、後に、かつての知人を思い出したり、昔そのものを思い起こさせることの契機となる定型表現となった。この歌もその型を踏まえた本歌取りである（俊成の家集「長秋詠藻」によれば「はな

なった人のことを想起し、過去のどこかにひたっていた自分がふと我に返って、自分もいずれ世を去り、そんな風に誰かに偲ばれる日が来るだろうか、と考える。その転換とそれに伴う心の動きを詠んだ歌なのだろう。自分にはそんな人はいないのではないか、といった不安なり絶望を抱えている主体でなければ歌にならない、ということでもないはずである。「また」と「も」に注意して、一首の表現意図を正確につかみたい。

問 **この歌の本歌を答えよ。**

答 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

問 **「思ひ出でむ」の「む」を文法的に説明せよ。**

答 推量の助動詞の連体形

問 **「昔の人」とは、どのような人か。**

答 故人

補 語句の研究参照。

問 **「なりなば」の「な」を文法的に説明せよ。**

答 完了の助動詞「ぬ」の未然形

たち花を人々よみけるに」の詞書から「花橘」の題詠らしい。「また」とある以上、ここで主体自身が花橘の香りから何らかの懐旧の営みを為していることになる。

4 我も昔の人となりなば　「私もまた世を去って昔の人となってしまったならば」。「なば」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に、順接仮定条件の接続助詞「ば」が付いたもの。「昔の人」は、本歌「五月待つ」（二六一・2〜3）においては昔交際していた恋人のことであるが、「我も」とあるのでその意味はとりにくい。かつての恋人のことを今まさに思い出していながら、現在交際している人に（これから先別れた後で）かつての恋人として思い出されるのを想像することになってしまうからである。父の家集を紐解きながら亡き父を思い出す壬生忠見の「ことのはの中をなくなくたづぬれば昔の人にあひみつるかな」（「新古今和歌集」・巻十八）や、信西の妻の死に際して西行の詠んだ「船岡の裾野の塚の数添へて昔の人に君をなしつる」（「山家集」中・雑）のように、「故人」の意味で解すべきであろう。自分の死後、自分のことを思い出して偲んでくれる人がいるだろうか、と想像している一首なのである。

作者

藤原俊成

永久二（一一四）年～元久元（一二〇四）年。名はしばしば「しゅんぜい」と音読される。中古三十六歌仙の一人。藤原俊忠男。崇徳天皇の愛顧を受けて歌人的立場を得、多くの歌合の判者となるなどの実績を積み、歌界の第一人者となる。哀感のこもった抒情を、優美な表現で歌うことを得意とした。「千載和歌集」の撰者を務め、その後も新古今歌人たちの指導的役割を果たした。藤原定家の父。家集に「長秋詠藻」、歌論に「古来風体抄」（式子内親王に献呈か）などがある。

鑑賞

「古今和歌集」「五月待つ」の歌をふまえて、いま、自分が花橘の香りから懐旧に浸っている現在が、自分の死後に遠い過去として何者かによって思い出されるようなことがあろうか、というのであるが、過去をふまえて未来からの懐旧を現在時に想像するという点で、ライバルである藤原清輔の、『百人一首』にも採られた、

ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

と比べてみたくなる。自身の抱えたつらさや苦しさを懐かしく思い出すのが現在も未来も作者自身である清輔の歌に対し、当該歌においては現在の懐旧が本歌取りによって行われているからには（「私が古歌に詠まれた人のように昔の人を思い出しているように」というわけであるから）、懐旧するのは、過去・現在・未来それぞれ別の人であることになる。しかも、その営為を媒介するのは、「五月待つ」の歌と、「五月待つ」をふまえた当該歌であることになる。清輔のそれが未来への希望であったように、当該歌もまた、古歌のみならず、古歌をふまえて新歌を詠み出す行為までもが世代を超えて受け継がれていくであろうことの予祝でさえあったのかもしれない。仮にそうであるなら、初句の係助詞「か」は、やはり反語であってはならないのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

藤原定家

西行法師　勧め　て、　百首歌　詠ま　せ　侍り　ける　に
マ下二・用　接助・単接　マ四・未　使・用　補動・ラ変・用（丁）　過・体　格助・時間

見渡せ　ば　花　も　紅葉　も　なかり　けり　浦　の　苦屋　の　秋　の　夕暮れ
サ四・已　接助・順偶　係助・列挙　係助・列挙　形ク・用　詠・終　格助・体修　格助・体修　格助・体修

撰者→読者

（巻四・秋上・三六三）

西行法師が勧進して、百首歌を詠ませましたときに（詠んだ歌）
見渡してみると、花も紅葉も（美しいものは）何もないのだなあ。（それがまた趣深いよ。）この浦の苦屋から見る秋の夕暮れの光景は。

《主題》
花も紅葉も美しいものは何もない、わびしげであわれ深い、秋の海辺の夕暮れ時の光景を詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問 **何句切れの歌か。**

答 三句切れ

問 **「なかりけり」の「けり」を文法的に説明せよ。**

答 詠嘆（気づき）の助動詞「けり」の終止形

問 **(1)「花も紅葉もなかりけり」（6行目）とは、どのような心情を表そうとしたものか。**

答 (1)美しいものは何もないが、それがかえって趣深いという心情。(2)「なかりけり」という言葉で存在を否定しても「花」「紅葉」のイメージはこの語が発せられた瞬間に残像として脳裏に定着する。その華やかなイメージが、かえって「浦の苦屋の秋の夕暮れ」のもの寂しい雰囲気を強調するという効果を持つ。

(2)この表現には、この歌のイメージを捉えるうえで、どのような効果があると考えられるか。

補 春の花と秋の紅葉とは、四季折々の美しい景物の中でも、最も美しいとされるもの。つまり美的景物の代表である。すなわち、

語句の研究

●二六三ページ

5 西行法師勧めて　西行は、最晩年の文治二（一一八六）年から四年にかけて、慈円・藤原定家・藤原家隆・寂蓮・藤原隆信や都の新進気鋭の歌人たち、伊勢神宮の神官たちに、伊勢神宮に奉納する目的で百首歌を詠ませた。これを「二見浦百首」（または「御裳濯百首」「伊勢百首」とも）という。なぜ仏教者の西行が、伊勢神宮に奉納させたのか、という疑問が当然起こり得るが、それにはまず当時の神仏習合思想を知る必要が

「美しいものは何もないのだなあ。」という意味になる。本来四季の和歌とは、美しく心惹かれる景物を詠むものである。それが「ない」とは、どういうことか。ここに、意欲満々たる青年定家の、歌人としての客気を見ることができる。そういう大胆無類の表現によって、何を表そうとしたかについては諸説がある。だから、発問によってさまざまな答えが返ってきたとしても、一概にそれを否定せず、それだけさまざまな解釈を許容してきた、難解で含みの多い表現であることを理解させたい。まとめると、①花も紅葉も問題にならないほど美しい。②花も紅葉もないが、それがかえって趣深い。③花も紅葉もない、そのように万物は虚無である、などとなる（「新古今和歌集全評釈」）。そうした諸説があるものの、やはり穏当な解釈は、②であると思われる。助動詞「けり」は、この場合詠嘆などと言われるが、詠嘆でも過去でも通底するのは、「今まで気づかなかったけれども、実は…だったのだなあ」という、気づきの助動詞としての性格である。「浦」すなわち海辺に花や紅葉がないのは当たり前であり、それなのに今さらのように気づくということは、それまでその海岸の風景に、我知らず心惹かれていたことを示すのだろう。わびしげな風景に「あはれ」を感知していたのである。花や紅葉が美しい、といえば、それは言葉だけだろう、と言われかねない。だが、「ない」と断じることによって、かえってありありと花や紅葉のリアリティが甦る。なぜなら、そういう美しいものを求めざるを得ない情念が、そのリアリティを支えるからである。所詮「美しさ」とは、それを求める人の心に宿るものだから。定家はこうした大胆な否定表現をしばしば用い、非在の美を浮かび上がらせた。そうやって浮かんだイメージを残しつつ、そういったものが一切ない風景のわびしさを述べている。

問　この歌とともに、次にあげた二首を総称して、一般的に何と言うか、答えよ。

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ（寂蓮）
心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（西行）

答　三夕の歌

問　この歌とともに、「三夕の歌」と総称される他の二首と、その作者名を答えよ。

答　前問、鑑賞参照。

ある。それは、本来は手の届かない崇高な仏（本地仏）が、日本人に分かりやすい形で姿を現してくれたのが神（垂迹神）であり、仏と神を一体のものとする考えだが、伊勢神宮の本地仏は真言宗で最も中心となる仏、大日如来であった。西行は、高野山に長年住んでいたことからも察せられるように、真言宗を中心に諸宗を修めたらしい。そして特に晩年になって、伊勢神宮とのかかわりを積極的に深めていったようである。後には歌界の指導者となる藤原定家も、このときはまだ二十五歳の青年にすぎなかった。憧れの先達西行のお声かりに、彼はさまざまな意欲作を作って応えようとした。

6 浦の苫屋　「苫屋」は、苫（スゲ・カヤなどで編んだもの）で屋根などを覆った粗末な小屋で、漁師らの小屋を指す。通常この歌は、海辺に苫屋が点在する風景を描いたもの、と鑑賞されることが多い。しかし、大事なのは、作者がその苫屋に宿っている事実である。もちろんこの場合の作者は藤原定家その人ではない。訳あって都を離れ、海浜をさすらっている人物である。例えばそれは、須磨・明石にさすらう光源氏などがふさわしい。古来この歌は、「源氏物語」

明石巻の、「はるばると、物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか春秋の花・紅葉のさかりなるよりは、ただそこはかとなう繁れる陰どものなまめかしきに」の部分の影響があると言われている。かつて都で見た花や紅葉のような華麗なものは、何一つここにはない、とこの人物は嘆く。しかしまた、そういう流離の憂いをまとわりつかせながら、この海辺の夕暮れの光景は、かえってひとしお哀れに胸を締めつけてくるではないか。なぜそういう解釈になるかというと、これが西行の勧進した百首でのように、歌ということが根拠となる。西行自身にも苦屋に宿る歌はあるが、西行が追慕した能因の旅の歌に、「世の中はかくても経けり象潟や海人の苦屋をわが宿にして」（「後拾遺和歌集」羇旅）とある。定家の一首も、そういう流離する旅人の見た風景なのだ。

作者

藤原定家

名はしばしば「ていか」と音読される。応保二（一一六二）年～仁治二（一二四一）年。藤原俊成男。九条家の恩顧を受けつつ、和歌の新風を起こし、後鳥羽院に認められて、歌界をリードする存在となった。本歌取り技法の完成者で、巧緻・華麗な表現では、和歌史随一。「新古今和歌集」の撰者の一人となり、「新勅撰和歌集」の単独撰者となる。家集に「拾遺愚草」、歌論に「近代秀歌」「詠歌大概」、秀歌選に「小倉百人一首」、擬古物語に「松浦宮物語」、日記に「明月記」など、多数の著作があり、古典の書写や校訂にも多くの業績を残した。

鑑賞

特別何の指示もせず、この歌を絵にしてみるという課題を出したとして、その絵に、人の姿を描こうとする生徒は、いったいどれほどいるだろうか。「見渡せば」とあるように、花も紅葉もない景を目にしている主体が間違いなくいるはずなのに（この歌の場合、あるいは「なかりけり」にも引きずられてしまうかもしれないが）、我々は特殊な景ばかりに着目して、この主体の存在を忘れてしまいそうになる。そういうわけだから、「花も紅葉もなかりけり」と詠嘆する主体は、いったいどこからどのような気持ちで、その景を見つめているのか、という発問はさらなる難題になる。絵に人の姿を描く発想のない生徒には、「苦屋の秋の夕暮れ」を、「苦屋から見る秋の夕暮れ」とは解釈できそうにないからである。

おそらくこの歌の解釈にあたっては、海辺にいればこそ最初から眼前にないはずの花や紅葉を持ち出してきて、わざわざ「なかりけり」と嘆じるような主体とはどのような人なのか、という問いがむしろ先に立つべきなのである。西行の勧進した百首であるという詠歌事情（語句の研究参照）は、主体が流離する旅人であることに思い至る重要な材料になるだろう。

この歌は、「新古今和歌集」巻四の中の、「秋の夕暮れ」を詠んだ三首の名歌、いわゆる「三夕」の和歌のうちの一首でもある。他の二首は、

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ
（寂蓮）

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（西行）。

であるが、各々によって立ち上げられる夕暮れの景の鑑賞よりも、その景の前に立つ人とその景との関係こそが、むしろ教室で問われるべき課題であるようにも思われてくる。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

摂政太政大臣家歌合に、湖上の冬の月　藤原家隆

摂政（せっしょう）太政大臣家歌合（だいじょうだいじんけうたあはせ）　格助・時間
に、　格助・体修
湖上（こしやう）　格助・体修
の　格助・体修
冬（ふゆ）　格助・体修
の　格助・体修
月（つき）

志賀（しが）　格助・体修
の　間助・詠嘆　カ四・体
浦（うら）　格助・起点
や　ラ四・用　接助・単接
遠（とほ）ざかりゆく　ダ下二・体
波間（なみま）　格助・体修
より　格助・体修
凍（こほ）り　格助・体修
て　接助・単接
出（い）づる　格助・体修
有明（ありあけ）　格助・体修
の　格助・体修
月（つき）

（巻六・冬・六三九）

摂政太政大臣家の歌合のときに、「湖上冬月」（という題で詠んだ歌）

志賀の浦の、（水際から凍ってしだいに）遠ざかってゆく波の間から、凍りつい（たような冴えた光を放っ）て上ってくる有明の月よ。

《**主題**》

冬の夜、琵琶湖の湖面から、凍りついたような冴えた光を放って上ってきた有明の月を見つめた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問　**「波」が「遠ざか」（8行目）ってゆくのはなぜか。**

答　夜が更けるにつれて寒気が強まり、水際から凍ってゆくので。

補　「後拾遺和歌集」に収められた快覚法師（かいかくほうし）の本歌、「さ夜ふくるままにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」に依拠した表

語句の研究

●二六三ページ

7 摂政太政大臣家歌合　摂政太政大臣は、藤原良経（よしつね）のこと。良経は後法性寺関白兼実の次男。慈円は叔父。「新古今和歌集」には、西行・慈円について第三位の入集数。新古今時代の中心歌人の一人で、自身も歌に天与の才を発揮しつつ、定家ら新風歌人のパトロン的存在でもあった。彼の主催した歌合は「六百番歌合」など多数あるが、この「摂政太政大臣家歌合」もその一つで、正治（しょうじ）元（じ）（一二九九）年冬に、左大臣だった良経の家で催された。良経・兼実・定家・家隆・隆信・寂蓮らが参加したことが分かっているが、歌合本文は現存しない。歌題は「寒樹交松」「池上半氷」など、全て冬にちなむ四字題であった。

7 湖上の冬の月　「湖上冬月」という四字題。湖の上に冬の月が掛かっているさまを詠む。こういう、制約の多い題を出されて、どのように発想していくかが問題となる。まず、湖をどこの湖とするかを決めないといけない。その湖上に冬の月が出るわけだが、秋でも春でもなく、いかにも冬らしい月を描出する必要がある。そして何よりも難問な

現であるから、これに従って解釈すればよい。快覚の一首は「夜が更けるにつれて、波の音が次第に小さくなってゆく、あれは琵琶湖の志賀の浦の水際から凍っているのだろうか。」と想像した歌である。琵琶湖の深夜の結氷を、音で表すという、意表を突いた発想が主眼。だが奇想だけがこの歌の持ち味ではない。しんしんと更けてゆく夜、その中で心を澄ませて一人波音に聞き入っている人物が浮かび上がるのである。快覚は琵琶湖に程近い三井寺の僧だから、これは彼の実体験から生まれた歌かもしれない。一方の家隆の歌は、その発想をそっくり受け継ぎつつ、これを視覚的なものとした。もちろん音はそのままに。いくら広い琵琶湖でも、月が湖面の波間から出ることはあるまい。やはり山の端から出るだろう。だからこれは幻想的な光景である。そして茫々と広がる琵琶湖の空間の気分をも醸し出すのである。

問　**この歌の情景として、適切なものを次の中から選べ。**

(ア)寒々とした湖の静けさ。
(イ)暗くよどんだ月の光。
(ウ)湖上の月の冴えた明るさ。
(エ)凍りついた湖面の不気味さ。

答　(ウ)

問　**この歌の本歌「さ夜ふくるままにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」とを比較し表現の違いを説明せよ。**

答　水際の氷が張り広がるにつれ、波が沖のほうへと退いてゆくという光景を本歌から借用してはいるが、本歌にはない「月」を湖上に配することによって、寒く暗い湖に、冴えて澄んだ明るさを付け加えて、歌の世界を広げている。

問　**前の問を踏まえて、「新古今和歌集」で多く見られる本歌取りという技法の効果についてまとめなさい。**

答　この歌は本歌にはない内容を歌い上げている（前問の答参照）。つまり、本歌取りは、単なる古歌の模倣ではなく、古歌に描かれた世界を踏まえながら、さらにその上に独自の世界を構築し、作品に厚みを持たせるという効果を狙った方法なのである。

のは、その湖と冬月を、どうやって必然的に結び付けるか、である。ただ某湖の上に冬の月が出ましたと詠んだのでは、題そのままで、何の工夫もない駄作になってしまう。某湖らしさと、冬月らしさをどう掛け合わせて表現するか、である。これは難しい。家隆は、その難問に、本歌取りという武器で立ち向かった。つまり、琵琶湖の厳しい冬の情景を表現するのに、本歌の手を借りたのである。

8志賀の浦　琵琶湖の西岸、滋賀郡志賀町のあたりの浦。志賀の地は現在の滋賀県大津市及び滋賀郡で、大津宮が置かれた旧都で、地理的特徴から、津・浦・波・山などとも詠まれて、院政期以降急増し、『新古今和歌集』の時代にピークを迎える。「志賀浦」として「最勝四天王院障子和歌」や「建保名所百首」にも出題された。

8や　間投助詞。こうした「や」は、和歌に特徴的に見られる、連体修飾格の「の」に代えて用いるものである。したがって、「の」と現代語訳するとぴったり当てはまる。「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」の「や」も同じ。「や」の上の体言でまず大きな空間を提示し、ついで

より小さな場所を提示する用法である。もとより「の」と全く同じというわけではなく、「や」でいったん小休止が与えられ、そこに詠嘆がこもる。大きな空間に心が開放されていくような悠揚迫らざる調べを、音読を通して身体的に確かめさせたい。

8遠ざかりゆく　「ゆく」は「しだいに…する」の意を添える補助動詞。

8凍りて出づる　月が凍ったような冷たい冴え切った光を放つのであり、それは冬の月の印象を捉えたものであるが、その原因を、凍ってゆく波間から出てくるから、という論理で上の句と結び付けた。本歌の生かし方が巧みである。

8有明の月　夜が明けても空に掛っている月のことだが、ここではまだ月の出を迎えたばかりだから、夜明けではない。夜遅くなってようやくに東から顔を見せた月、である。

捨山に照る月を見て」のような例を知ると、ここでも「の」と置き換えて、構図的に大きな空間から湖上の月に絞り込まれていくという解釈の方向性が最適であるように思われてくるのである。

ところで第四句「氷りて出づる」は、後年制詞（中世の歌道において使用を禁制している歌句）とされた。いくらでも応用が利きそうであるだけに、この後乱用されてしまったのだろうか。

作者

藤原家隆

保元三（一二五）年～嘉禎三（一二三七）年。藤原光隆男。藤原俊成の門下生で、定家とともに新風を起こし、「新古今和歌集」撰者の一人となり、定家と並称される存在となる。家集に「壬二集」（「玉吟集」とも）がある。

鑑賞

初句の間投助詞「や」の解釈の仕方で印象は大分変わってくる。詠嘆を表すと考えると、俳句における切れ字の感覚から、感動の中心があって、意味上も切れ目になるはずではないかとどうしても意識しがちになる。とはいうものの、新大系のように「志賀の浦よ。」と切ってしまうくらいなら、新全集のように「志賀の浦では」と空間としての認識を示すことで一呼吸おく、という方がすっきりしそうである。ただ、語句の研究にも示した「更科や姥

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

式子内親王

百首歌（ひゃくしゅうた）　の　中（なか）　に、　忍（しの）ぶる　恋（こひ）　を
格助・体修　格助・場所　バ上二・体　格助・対象

玉（たま）　の　緒（を）　よ　絶（た）え　な　ば　絶（た）え　ね　ながらへ　ば　忍（しの）ぶる　こと　の　弱（よわ）り　もぞ　する
格助・体修　間助・呼掛　ヤ下二・用　完・未　接助・順仮　ヤ下二・用　完・命　ハ下二・未　接助・順仮　バ上二・体　格助・主格　ラ四・用　連語（係助・同類＋係助・強意（係））　サ変・体（結）

（巻十一・恋一・一〇三四）

百首歌の中に、「忍恋」（秘めた恋）という題を（詠んだ歌）

我が命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。（もし、このまま）生きながらえていると、（恋心を）秘めておこうとする力が弱まってしまうといけないから。

《主題》

恋心を隠しとおす苦しさに堪えきれず、いっそ死んでしまいたいという恋心の極まりを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六四ページ

問　**「絶えなば絶えね」（2行目）について、(1)「な」「ね」をそれぞれ文法的に説明し、(2)この部分を現代語訳せよ。**

答　(1)な…完了の助動詞「ぬ」の未然形　ね…完了の助動詞「ぬ」の命令形　(2)我が命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。

問　**「忍ぶること」（4行目）が弱るとは、どのようなことか。**

答　秘めていた恋心があらわになり、人に知られてしまうということ。

補　「忍ぶる」は、「堪え忍ぶ、こらえる」の意の上二段動詞「忍ぶ」の連体形。恋心を人に知られないよう、心の中に秘めて堪え忍ぶことを表す。その力が弱まるのだから、当然、相手やそのほかの人にも知られてしまうことになる。世間の人に対してだけならともかく、どうして相手にもそこまで秘密にしなくてはならないのか。しばしばそれは、式子内親王が賀茂斎院であったこと

語句の研究

●二六四ページ

1百首歌　百首歌とは、一人または複数で百首を単位として詠んだもの。個人で詠むものは、社寺への奉納や練習を目的として行われることが多かった。多くの場合、前もって決めた題にもとづく題詠による。ただ、ここでの「百首歌」は何の百首か、不明。式子内親王の家集「式子内親王集」は主として三種類の百首から成っているが、これはその中にではなく、家集末尾の、「勅撰

と結び付けて解釈され、謡曲「定家」など、その恋の相手を、藤原定家とする説も生じた。式子内親王に秘められた思い人がいたことの確かな根拠はないが、否定することもできない。ただ、なにも作者の実体験に還元しなくても、古典作品の中にも、恋の露見がすなわち破滅につながる恋愛は少なくない。式子内親王自身の具体的な恋愛沙汰を踏まえるというより、そういう古典の世界に自己の情念と想像力を開放した、と見るのが穏当であろう。

問　**「もぞ」に注意して、この部分を現代語訳せよ。**

答　恋心を秘めておこうとする力が弱まってしまうといけないから。（ずっと耐え忍んできた恋心が、耐えきれずに表に出てしまってはいけないから。）

に入るといへども家集に見えざる歌」の部に入っている。それゆえ、作者が何歳頃に詠んだかなども、判然としない。

1 忍ぶる恋　「忍恋」の題詠であることを表す。本書では「忍ぶる恋」と読んだが、「忍ぶ恋」と読むこともできる。前者なら「忍ぶ」を上二段動詞としたのであり、後者なら四段動詞として訓じたことになる。「こらえる、隠す」意の「忍ぶ」は本来上二段動詞で、「偲ぶ」（本来四段活用）との混同から、平安時代になって四段活用も現れるようになった。したがって「忍ぶる」と訓じるのが本来ということになる。「忍恋」は、相手に恋心を打ち明けられず煩悶する内容を詠む題であり、恋の初期段階を示す。つまり、恋しい相手に「忍ぶ」のであって、相愛の男女が世間にひた隠しにしているのではない。現代でいえば、「片思い」に近いだろうか。

2 玉の緒よ　「玉の緒」は、本来宝玉を貫き通す緒のこと。「玉」が「魂（たま）」に通じるところから、霊魂が身体から離れないようにつなぎ留めておくもの、すなわち命の意に転じた。また、「玉の緒の」の形で、「絶ゆ」「長し」「短し」「乱る」などに掛かる枕詞として万葉時代から用いられてきた。そうした用法も取り入れながら、二句以下の縁語を導き出している。ここで切れ、初句切れとなるが、この初句切れの呼びかけは、きわめて大胆な表現と言い得る。

2 絶えなば絶えね　「絶え」は「玉の緒」の縁語。「な」も「ね」も完了の助動詞で、前者は未然形、後者は命令形。「絶えてしまうのならば、絶えてしまってくれ」と我が命に呼びかける形をとる。自分の力ではどうしようもなくなった恋心の高まりが感じられる。

2 ながらへば　「ながらへ」は「ながらふ」の未然形で、「ば」は順接仮定条件の接続助詞である。確定条件と間違えないように注意が必要。「絶えなば」「ながらへば」と一首中に二つの仮定条件が入るのは、破格と言い得る。もしこうなったら、もしああなったら、とうねるように乱れる心が、言葉の形にも実現している。「ながらふ」は「玉の緒」の縁語。

2 もぞ　「も」も「ぞ」も係助詞。将来起こり得る困った事態を想定して、「…すると いけない」「…したら困る」と、それを心配する気持ちを表す。

作者

式子内親王

「しきしないしんのう」とも。久安五（一一四九）年～建仁元（一二〇一）年。生年は比較的近年に判明した。後白河院第三皇女で、以仁王・守覚法親王らと同腹。平治元（一一五九）年賀茂斎院となり、嘉応元（一一六九）年退下。藤原俊成の指導を受け、「古来風体抄」を献呈される。巧緻な表現を得意としつつも、高貴な人らしいのびやかさがある。「新古今和歌集」随一の女流歌人。家集に「式子内親王集」がある。

鑑賞

秘めた恋心が露見するくらいなら、いっそ死んでしまいたい、とは、ずいぶんと衝撃的である。初句は呼び掛け、二句に仮定＋命令、三句に仮定、五句に懸念と、一首の内に普通の叙述がほとんどなく、初句と二句で連続して句が切れていくことなど、表現にも尋常ならざるところがあり（渡部泰明「和歌とは何か」）、切実さを印象づけている。そのほとばしる感情を表す言葉たちには、「絶え」「ながらへ」「弱り」がすべて「緒＝糸」の縁語となるように、さしづめ運命の糸にからめ取られるようにして、しっかりと真に迫る必然性が与えられているのである。

ただ、『新古今和歌集』の詞書を信じるなら、題詠歌である以上、一首に詠まれているのは虚構の恋である。しかも、「忍恋」題は一般には求愛をする男性の状況を詠むものであるから、後藤祥子（「女流による男歌」）が明らかにしたように、ここでの主体も男性であるとするのが自然だと考えられている。そのように、題詠においては、男性作者が女性の立場で、女性作者が男性の立場で詠むということも、それほど不思議ではないのである。

斎院を務めた女性は生涯独身を貫くことも多く、式子内親王もまた、制約の多い人生を送ったことは想像に難くない。しかし、たとえば題詠というある種の設定による歌のなかでは、自由に別の人格を生きることもできたはずである。彼女によって詠まれた想像の世界の恋のうちにという意味でなら、そこにあるいは謡曲「定家」に語られるような恋があったとしても少しもおかしくはないのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

東（あづま）の　方（かた）へ　修行（しゆぎやう）し　侍（はべ）り　けるに、　富士（ふじ）の山（やま）を　詠（よ）める　西行（さいぎやう）

格助・体修　格助・方向　サ変・用　補動・ラ変・用（丁）撰者↓読者　過・体　格助・時間　格助・対象　マ四・已　完・体

風（かぜ）に　なびく　富士（ふじ）の　煙（けぶり）の　空（そら）に　消え　て　ゆく　へ　も　知ら　ぬ　わ

格助・理由　カ四・体　格助・体修　格助・主格　格助・帰着　ヤ下二・用　接助・単接　係助・同類　ラ四・未　打・体　代

が　思ひ（おも）　かな　（巻十七・雑中・一六一五）

格助・体修　終助・詠嘆

東国の方へ修行で参りましたときに、富士の山を詠んだ（歌）
風に吹かれてなびく富士山の煙が空の彼方に消えてゆくように、行方も分からない私の思いであることだよ。

《主題》

風に消えてゆく富士山の噴煙に、漂泊する自らの思いを重ねた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六四ページ

問 **「風になびく富士の煙」（4行目）は「わが思ひ」のどのような例えになっているのか。**

答 いつまでも、そして何処までもさまよい続ける情念を象徴している。

補 「わが思ひ」を「空に消えて」を根拠に、儚く消えてしまうものというイメージのみでは捉えないでほしい。「新大系」が「無心に大空へ解き放たれた心」だと説明しているように、おそらくは老境にあっても依然としてくすぶり続ける思いの形象としての性質をこそ認めるべきであろう。そして、そうした意味で捉えたときに「思ひ」の「火」などという掛詞が、この一首においても活きることになるのではないかと考えたい。

問 **古典において富士山はどのような山と捉えられているか。**

答 噴煙を上げる火山。

問 **この歌が富士山を詠んだ歌として、それまでの多くのものと比べて特殊であるのはどのような点か。**

答 都の人々と異なり、西行が実際に富士山を

語句の研究

●二六四ページ

4 風になびく富士の煙の空に消えて 「風に吹かれてなびく富士山の煙が空に消えて（その行方も分からないように）」。古典和歌における富士はしばしばその火山活動のさまを詠まれているが、西行のように実際に東国へと旅をし、自分の目で見た富士を歌に詠む機会を得られた者は決して多くなかった。そして西行自身、この歌を自信作と考えていたのか、「わが第一の自嘆哥」と語ったという（慈円「拾玉集」第五）。

見て詠んでいる点。

問 **和歌において「ゆくへも知らぬ」ものとして詠まれるのは多くの場合、どのようなことか。**

答 先行きの見えない恋の状況。

問 **「新古今和歌集」の歌集の表現の特徴をまとめなさい。**

答 洗練を極めた題材・用語を用い、余情に富んだ象徴的な表現として生かされている。感覚的な優美さ（艶）や突き詰めた閑寂味が好まれた。調べは七五調で、初句切れ・三句切れ・体言止めが多い。特に注目すべき技法は本歌取りである。摂取した古典に敬意を払い、作品として新たに再生させるかの如きその技法は、多くの歌人たちの切磋琢磨によって高められていった。その結晶こそ「新古今和歌集」の達成に他ならない。

作者

西行

元永元（一一一八）年～建久元（一一九〇）年。歌人。俗名佐藤義清。法名円位。佐藤康清男。若くして鳥羽院の北面の武士になったが、保延六（一一四〇）年、二十三歳で出家。高野山などに草庵を構える一方、伊勢、熊野、吉野など諸国を修行し、現実感あふれる多くの和歌を残した。家集に「山家集」「山家心中集」「聞書集」など

ここまでの上の句全体が、「ゆくへも知らぬ」を起こす、いわゆる有心の序になっている。

4 ゆくへも知らぬ　「行方も分からない」。この歌は、「西行上人集」では恋の部に収められている。確かに「新古今和歌集」に見える曽禰好忠の「由良の門を渡る舟人梶を絶えゆくへも知らぬ恋の道かな」（巻十一―一〇七一）のように、「ゆくへも知らぬ」という言葉続きは、先行きの見えない恋の状況を思い起こさせやすいものだろう。仏道修行を題材とする歌においても随所に恋歌的な発想や表現が目に付くのは、実は西行の歌の特質でもある。風に吹かれた煙が何処へともなく消えていく様子は、出家した後も修行の旅を続け、人の心と世の在り方の転変に常に思いを馳せ続けた彼自身の姿に擬せられたものであったのかもしれない。

4 わが思ひかな　「私の思いであることよ」。「かな」は詠嘆を表す終助詞。「思ひ」の「ひ」には上の句の「煙」の縁語「火」が掛けられている。そのような尽きることのない情熱の火を抱えた「思ひ」がどのようなものであったのかについて、やはり軽々しく限定などできないのだが、ひとまず「人間の生そのものに対する情念」（久保田淳「新古今和歌集全評釈」）といった理解に従っておきたい。

鑑賞

慈円は、文治六（一一九〇）年二月十六日の西行の死に際し、

願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃

があり、自歌合に、「御裳濯河歌合」「宮河歌合」がある。「西行上人談抄」はその歌論を記したもの。「新古今和歌集」入集数第一位。

（※『拾玉集』では第三句「我死なん」）を引き、西行が本当に歌の通りに亡くなったことを「世にもあはれがりけり」と記したのに続けて当該歌を示し、これは「この二三年の程に」詠んだもので、「これぞわが第一の自嘆哥（自信作）」と語ったと述べている。『新古今和歌集』の詞書には「東の方へ修行し」とあるが、西行は文治二年に、平泉の藤原秀衡に東大寺大仏復興のための寄進を願い出る旅に出ており、この際に富士を目にしているとすれば時期的にも符合するから、確かに晩年の作ではあるのだろう。

しかし、西行を尊崇する人々の感慨はどうあれ、当該歌は老境の諦念を詠んだものでも辞世の類でもないのではないか。先行きの分からない恋の状況に用いられることの多い「ゆくへも知らぬ」という言葉続きは、いかなる状況におかれても、恋する人の心は抑制し難いものであることを示唆する。老境においてなお、富士から煙が絶え間なく立ちのぼるように、なにものかを探し追い求めようとする「思ひ」の火が、依然として自らの内に抱え込まれていることをあらためて確かめているような一首であると思われるのである。